

コンスタンチン・ビーブルの詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』におけるエキゾティシズム

阿部 賢一

1. ボヘミアの海岸、ボヘミアのエキゾティシズム

シェイクスピアの『冬物語』でボヘミアに海岸が出現することはよく知られている。内陸の土地であるはずのボヘミアに海岸があるという現実離れした設定であるが、大橋洋一によれば、中欧に出現した海は「海のなかにボヘミアの地を重ね書きもするという双方向的相互作用」を実現しているという。メタドラマ的観点を活かしたシェイクスピア劇は「虚構が、夢が、妄想が、幻想が、現実浸透し、現実を支えていることを絶えず認識させる装置に満ちている」¹からである。

かたや内陸のボヘミアに暮らす人々にしてみれば、海はつねに羨望の対象であり、多くの詩人が海を詩の題材としてきた。中でも、その傾向が強く現れているのが、1920年代のポエティスムの運動だろう。異国情緒たっぷりの非日常やサーカス、ヴァリエテなどを好んで取り上げ、ポエジーに溢れる世界を探求したポエティスムの人々は、異国を舞台にした作品を次々に発表した。ヤロスラフ・サイフェルトは、詩集『TSFの波に乗って』（1925）の中で、フランス、イタリア旅行に触発された詩を発表し、ジェノア、マルセイユ、コート・ダジュール、アフリカ、ニューヨーク、横浜といった土地を次々と渡り歩く。またヴィーチェスラフ・ネズヴァルの第二詩集『パントマイム』（1924）で「エキゾチックな旅」という一編を描くなど、この世代の世界観は異国への強い関心に裏付けられていた。しかしながら、彼らにとっての異国はしばしばフランス、イタリア、地中海といったヨーロッパが中心であった。アフリカについてはしばしば大陸名でまとめられ、アジアに関しては関東大震災の関連で横浜が言及される程度であり、いわゆる彼らの「メンタル・マップ」²は往々にしてヨーロッパに偏重していた。

そのような中、東方とりわけ東南アジアに滞在し、その体験を詩作に反映させた詩人として、コンスタンチン・ビーブル（1898-1951）がいる。1920年代半ばにインドネシア、ジャワに滞在した経験を基にした詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』（1927）は、東南アジア滞在を「徹底的に自分の作品に投影し、エキゾティシズムとプリミティヴィズムを見事に融合した」³作品として高く評価されている。ここでは、詩集と散文の双方を参考にしながら、東南アジアに対するビーブルの眼差しを検討していくことにする。

2. ビーブルの初期詩集

ビーブルが詩を書き始めたのは、第一次世界大戦が終わり、新生チェコスロヴァキア共

和国が誕生した1918年頃とされている。父が歯科医であったことから、プラハ大学医学部で勉強を始めるも、詩人イジー・ヴォルケルと知り合ったり、ブルノで結成された「文学グループ」の一員になるなどして大学を中退し、文学活動を本格化する。1923年には、同グループのメンバーでもあった叔父のアルノシュト・ラーシュ（1884-1925）と共著で詩集『人々への道』を、翌1924年には個人名義での初めての詩集『忠実な声』を発表する。ほぼ同時期、ネズヴァルと親交を深め、芸術家連盟デヴィエトスィルにも接近していく。その後、ポエティズムを代表する詩人の一人となり、1930年代中葉にはチェコ・シュルレアリスムのメンバーとしても名前を連ねる。だが同世代の詩人とビーブルの間には看過できない大きな差があった。ネズヴァル（1900年生まれ）、サイフェルト（1901年生まれ）よりも若干早い1898年にこの世に生を享けたビーブルは、その年齢ゆえに、第一次世界大戦に従軍した経験があったからである。18歳になったばかりの1916年には志願兵としてガリツィア戦線に向かい、ポーランドのヘウムで軍医として従軍していた父が自殺したという悲報を現地で受け取る。1918年1月にはモンテネグロの戦線で負傷し、生身の肌で戦争を感じ取ることとなった。それゆえ、戦争を直接体験することなく、享乐的なポエティズムの世界を表明するサイフェルトやネズヴァルとは異なり、ビーブルの詩にはユーモラスな外見は有していても、どこか死に対する怖れが潜んでおり、まさにその点において同世代の他の詩人たちと一線を画している。

例えば、1925年に発表された詩集『破損』には「予備兵」という詩がある。兵役に向かう予備兵に対し、思い出をすべて黒い鞆に詰め込むよう訴える声から始まるが、後半、それらの思い出の品が別の記憶を想起させる契機となっていく。戦場で肌身離さず持っていた「水筒やカラビナ」が戦場の記憶を思い出させる。「銃剣に置かれた指に夕焼けの紫の光が当たる／手鏡の黒い格子越しに／ずっと忘れていた殺人者が君を覗き込む／彼を待ちかまえるのは牢獄と絞首刑」⁴。戦場で人を殺めた記憶が蘇り、「殺人者」である自分が鏡に映り、「牢獄と絞首刑」という罪の意識に苛まれる。その際、詩の語り手は「君」と二人称で呼びかけたのち、同一の人物を「彼」と三人称で表現することで、戦場にいた自分と戦場を離れた自分、戦争の時間と戦後の時間の断絶を見事に表現する。戦争体験に基づくこのような詩的告白はポエティズムの作品の中では異例であり、ビーブルの特異性が際立っている。

だが、ビーブルは戦争体験のみを描き、つねに過去に執着していたわけではない。国家が独立し新たな世界の構築を模索していた同時代の他の芸術家同様、ビーブルもまた新たな領域を模索する。同詩集の「予備兵」の次に掲載されているのが、「出発」という詩篇である。語り手は海中深くにある船の錨が巻き上げられる音に耳を傾けるよう促し、このように訴えかける。

上へ、インドへ

さようなら、ボヘミア

ぼくはセイロンに向かう
 工場の煙突からはサイレンが歌っている
 睡蓮の花輪をほつきながら⁵

まるで戦争の記憶を払い落とすかのように、この詩編の一人称の語り手は軽やかにボヘミアの土地に別れを告げ、憧れの土地セイロンへの出発を高らかに歌い上げる。幼少期から父が好んで集めていた東洋の美術品などに囲まれて育ったビーブルは、東方、とりわけアジアへの関心を抱き続け、東方への渴望は、詩人ビーブルの生命線ともなっていく。その後、詩集『バグダットの泥棒』（1925）、『金の鎖』（1926）を発表し、東方世界への思慕、異国情緒に溢れる世界を高らかに歌い、ポエティズムの一翼を担うようになる。

3. 詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』

1926年10月27日、ビーブルは東南アジアに向けて、プラハのウィルソン駅（現在のプラハ本駅）を出発する。ドイツ、イタリアを経由し、ジェノアで乗船し、セイロン（現在のスリランカ）およびジャワへの旅が実現する。この東南アジア滞在の経験を下敷きにして発表されたのが、1927年末に発表された詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』である。ピンクと黒の二色刷りの幾何学的模様が特徴的な詩集は、カレル・タイゲの構成主義的装丁の代表作の一つとされ、「中央軸とシンメトリーを拒否する、よく考慮されたタイゲの〈非対称的な調和〉の完璧な事例」⁶と評されている[図1]。同詩集はこのような装丁を手がけたカレル・タイゲに献呈され、「魔法のかけられた泉」「紅茶と珈琲を運ぶ船とともに」「対蹠地の人々」の三部から構成される24篇の詩を収めている。



図1 ビーブルの詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』（1928）第二版の扉。

第一部「魔法のかけられた泉」は、東方への憧れが醸成されていった北ボヘミアの故郷スラヴィエチーンで過ごした日々が描かれている。「木の梢にはスラヴィエチーンが眠っている」という一節で始まる同名の詩は、故郷にある泉がユーモアを交えて描かれ、「訪問」では、「小学生の娘」を待ち構える「私」の気持ちが周囲の風景とともに描かれていく。東洋への関心を抱いていた父の影響もあってか、ビーブルが目にする幼少期の世界はどこか東洋的な眼差しを帯びる。詩「オリエント」⁷で、東方への思慕の念は、キリスト教の儀式の見方をも変えてしまい、果物の丸い形状ですら三日月刀の曲線と重ねあわされる。

その一方、「患者」では、戦争の影、とりわけ父の自殺が題材となる。「私の父は田舎の歯科医だった／娘たちの微笑みは父の手によって黄金と化した」とユーモラスな一節で始まった詩はこう続く。「戦争となり 郵便で父の服が送られてきた／家族は誰も紐を解く

ことができなかった」。父の形見に手を触れることはできず、「サーベル」「煙草入れ」と送られてきた遺品の名詞だけが羅列される。そして「茶色の乾いた汚れの金歯」⁸という一節で詩は結ばれ、歯科医だった父の記憶が金歯という遺品によって閉じられる。先にも触れたが、ポエティズムの世代で唯一戦争体験があり、また近い父の喪失により、享樂的だけではない世界観が影を落としている。この点は、のちに東南アジアに滞在する上でも、重要な背景をなすように思われる。

書名ともなっている第二部「紅茶と珈琲を運ぶ船とともに」は東南アジアにたどりつくまでの航海が題材になっている。まず同名の詩篇を引用しよう。

紅茶と珈琲を運ぶ船とともに
いつかぼくは遠いジャワに向かう

ジェノアを出港して一か月
船は緑の島にたどりつく

ぼくと君とでいっしょに行こう
小さなスーツケースと唇だけあればいい

ピラミッドを回ろう
モーセとその民が来るまで船は待ってくれるはず

細長い杖を手にし、埃まみれのオパンケをはいたモーセは
先頭に立って海藻や開いたイソギンチャクのあいだを通っていく

魚の群れは、乾いているところで鳥のように翼を広げ
水を求めて飛び、波に埋もれていく⁹

1926年10月にプラハを出発したビーブルは、ジェノアでドイツ船ヨルク号に乗船し、シチリア、クレタ、ポートサイドを經由して、シンガポールに至る。冒頭の二連では、著者ビーブルの実際の経路に基づいている。だが、詩篇では、具体的な日付の記述はないばかりか、動詞（Pojedu, vzpluje, stane, Pojedem など）の時制は不完了体未来形、あるいは完了体非過去であるほか、第三連で「君」への呼びかけがなされるなど、読み手がテキストを読みながら、ジャワへの旅を行なうよう訴えかけるものとなっている。第三連、第四連では一人称複数で「一緒に行こう」という表現が繰り返されるが、前者では読者の出発を促すにとどまっている表現が、後者では「ピラミッド」という具体的な指標が提示される。さらに語り手は「モーセとその民」という表現を用いて、エジプトを出発す

る自分たちの様子を「出エジプト記」になぞらえる。第五連では、主から与えられたという杖を手にして、それに埃にまみれたオパンケを履いて先導するモーセの姿が描かれる。詩行の脚韻が整えられたこの詩編の特徴は、ジャワ、ジェノアという地名、ピラミッド、モーセというエジプトを象徴する名詞が用いられ、空間的な広がりを感じさせるだけではなく、未来を示す動詞表現に加え、モーセの「出エジプト記」という旧約聖書の挿話が用いられることで時間的な奥行きが付与されている。そのような空間と時間の広がりの中で、人称が次々と変わっていく。前半で用いられた「ぼく」という一人称単数の表現が中盤では「ぼくと君」という一人称複数になり、さらにはモーセ、魚の群れという三人称となる。叙情的な私である語り手が読者を誘いながら、目の前に繰り広げられる（あるいは太古に繰り広げられた）風景を捉えていく仕組みになっている。

ビールの詩の特徴の一つは、ミクロの視点とマクロの視点が時に交錯することで生まれる落差のおかしさである。例えば、彼が乗船した船の名称が掲げられた「ヨルク号」という詩篇では、船内で飲んだり騒いだり、朝方まで踊ったりする様子が語られたのち、「投げ捨てられたコルクが海に急ぐ／ワインの栓よ／ヨーロッパを離れるのが不安なのかい？」¹⁰ という一節が挿入される。ワインのコルクという小さな対象が、ヨーロッパを離れる自分たちの旅程に重ね合わせられ、読者は心地よい驚きを感じる。また「放浪者」では、タバコを口にしながら世界を放浪する放浪者が「昨日はチベットの山を歩いていたかと思うと／今日は歌を口ずさみながら海を航海している」様子が描かれたのち、「神の世界の美しく、青いこと／放浪者はたえず駆け回っている／キリスト ブッダ ムハンマド／聖なる放浪者の三人組」¹¹ として、三人の聖人が言及されるが、ここには、宗派的な厳密さよりも、広い視野と比較の妙がある。

東南アジアの現地滞在の様子が本格的に描かれるのは、詩人ヤロスラフ・サイフェルトに捧げられた第三部「対蹠地の人々」である。背景となる。冒頭の無題の詩篇においては、念願の地に到着した昂奮冷めやらぬままに「熱帯の太陽、赤銅の太陽／マレー最古の神よ！」¹² と自然神を礼賛するように、自然への敬意がひとつ重要なポイントとなる。続く「メルバブ山にて」では標高 3145m を誇るジャワ島中部の火山を舞台にして、密林の様子が「バイオリンのネックが持ち上がるシダのなか」とメタファーとともに描かれる。

天に向かって竹とサトウキビが急いでいく
 あるいはベンガルトラが死につつある
 天に向かってマンゴーもバナナもマンゴスチンも急いでいく
 それはハンガリーのぶどうの
 房のような味わい

ああ、これはぼくが夢見てきたジャワ
 滝のさざめきに覆われた土地

パンを引きちぎりさえすればいい

樹木は新鮮なミルクを出してくれる¹³

中欧とはまったく異なる生態系への驚きと敬意の念が混ざり合い、語り手はある種の昂奮状態のなかで目に入る風景を自らの語彙を通して記録にとどめる。空高く伸びようとする植生の生命力と息絶えつつあるベンガルトラの死が対比され、空間的な「空」と同時に宗教的な「天国」という意味を備え持つ *nebe* という単語が用いられることでともに「楽園」へと向かう生命のありさまが示唆されている。さらに「ゼラニウムの梢を振りさえすれば／ダカット金貨の雨が／ひざもとに落ちてくる」という一節が続き、豊かな自然が富を生み出す対象でもあることが言及される。最後にその金貨が落ちてくるのは、「誰のところかって／それはぜったい訊いてはいけない」と結ばれ、ジャワに滞在するヨーロッパ人の存在、つまり植民地主義の一端が仄めかされる。

詩人が自然に払う敬意は植生だけではない。「アミン」では、「鳩のようにクルクルと鳴く」トカゲや「ブッダの聖なる瞳」をしたカエルが題材となる。後半、敷居にいたカエルの描写があったかと思うと、次の連ではジャワ人の老人がカエルに餌をあげる様子が描かれる。「私たちがカエルに触れると、墓のような冷たさを感じるも／瞳に涙が光る／カエルが老人の亡くなった子どもではないと／この世の誰も言えなくなる」¹⁴と続き、息子アミンの生まれ変わりとなるカエルのやりとりを通して、輪廻転生のモチーフが描かれる。

詩篇「トケー」では、自然に対する敬意よりもむしろ畏怖が主題となる。カボックやランブータンの木を飛び回るサルがいなくなり、夜が広がり始めると、悪魔のモモが辺り一帯を脅かすと冒頭で説明がなされる。その姿を見ようものなら、日本鼠の白い尾でもってしても治療が難しいという。「自分が何をしたのかわからない、モモ、許しておくれ／テーブルからロンボクや塩をはらうのは何ともないことだと思ってんだ」と詩人は切実な声を発する。状況を察知したのか、「サルはカボックからランブータンへと飛び回り／トカゲは発狂し、ヴィクトルカのような声を発する」¹⁵。そして詩篇は次の一節で終わる。「トカゲはガラスのような瞳でぼくを見ると／発狂して声を発する——トケー！／トケー——！」¹⁶。「トケー」という言葉そのものは、大半の読者にとって何も意味をしない、単なる音の羅列でしかないが、ボジェナ・ニェムツォヴァーの小説『おばあさん』に登場する発狂する女性ヴィクトルカの名前を引き合いに出すことによって、この言葉が超自然的な意味合いを帯びているのを読者は感じとる。現地語の使用は、この詩集の多様な世界を構築するひとつの仕掛けとなっているが、ここでは意味を拒絶することによって、この音そのものへの関心を高め、不可思議な世界観をつくり出す一助となっている。

ビーブルが同時期雑誌に発表されたエッセイにも、このエピソードのことが触れられている。そこで、チチャクという小柄のトカゲには好感を抱いたものの、夜行性のトケーにはなかなか馴染めなかったと詩人は告白する¹⁷。というのも、トケーはイスラム教の礼拝

を呼びかける「アラブのムアッジン」のように声を発するからだ。「その声はトカゲにしてはあまりにも悲しく、小さなトカゲにしてはあまりにも人間的だった」とする。あまりにも怖くなったビーブルは、オランダ女王の肖像画が描かれた絵の額縁に隠れ込んだトケーを押し潰す。だがトカゲの亡骸を外に捨てようとする、足元で陸生の蟹を踏み殺してしまう。足元の地面すら生きていた感覚を抱きながら、庭にトカゲを放り投げるのだが、今度は一匹のコウモリが室内に入りこみ、暗闇の中、室内を飛び回る。

楔形文字に似た謎めいた飛行をしばらく黙ったまま見ていた。残念ながら、私のこめかみの近くで黒い物体が描いたものが何か理解できなかった。もしかしたらバビロンの王女が手紙を寄越したのかもしれない。未熟な黒魔術の弟子のように、理解できないテキストから興味を失い、ファウストが寄越した使いのメッセージを邪魔するものは何かないかとあたりを見回した。そのとき、オランダ女王の絵に視線が止まったものの、私には女王の姿は見えなかった。トケーしか目に入らず、黒い額縁の下、それに、私がさっきトカゲを殺したその床の右角から頭を出している姿しか目に浮かばなかった。トケー！ トケー！

しばらくしてまた、トケー！ トケー！

ヨーロッパ人は懐疑主義者である。これは偶然でしかないと言いき、これは別のトケーだと判断を下すだろう。だが現地の召使であるジョンゴスは、私が残酷にも踏みつけたカエルを持ち上げて、こう言う。「いえ、これは先ほど死んだばかりのトケーです。戻ってきたのです」と。

ジャワの人たちは、魂の移り変わりを信じている。トカゲのトケーの声を耳にするものは、魂の移り変わりも信じている¹⁸。

このエッセイを読むと、このトカゲがいかにビーブルの心に刻まれたかを知ることができる。声を発する夜行性のトカゲの存在は、ビーブルの想像を超えたものであり、一人のヨーロッパ人がジャワに期待していた世界像を超える一つの象徴でもあった。さらにまたコウモリへの輪廻転生の可能性を感じ取り、自然の営為を巡る彼の目を開かせる事になる。興味深いのは、この出来事に際して、ヨーロッパ人の理性的な受け止め方とジャワの人々の考え方を対比している点である。実際の体験をまのあたりにしたビーブルはその両者の中間、いやむしろジャワの人々の立場に近い位置にいる。東方への憧れは畏敬となり、眼差しそのものの性格も変化を帯びていく。

詩篇「対蹠者たち」は、憧れの土地に降り立ったばかりの昂奮状態は収まり、むしろこの土地の別の様相を探りあてていく。「椰子の下で感じるあの永遠の疲労 あの恐怖」という一節から始まる冒頭は、「疲労」「恐怖」といった語彙により、語り手の眼差しがある種の経験を経たことをうかがわせる。クリスマスとは無縁での「青々とした葉」や「果物」にあふれている様子が謳われたのち、ふたたび椰子の下の疲労と恐怖について言及し、闇と白の対比が自然を通してなされる（「原生林の影は黒い扇で／白い極楽鳥を脅かす」）。

そして視点はヨーロッパへと移り、次のような一節が導かれる。

私は故郷を考える だから大地を見ている
 大地が透明だったら
 ヨーロッパの女性のスカートの中が丸見えになるだろう

白い下着をまとった足があちこちでちらちら動く
 まるでバレリーナのように
 パリでは鏡に合わせて踊る

そして詩人は、肩、瞳、口、髪と女性の身体を思い起こす。すでに指摘されているように¹⁹、ポエティスムの詩人たちの描く異国の世界はしばしば性的な含意を有し、男性中心的な眼差しが支配的であることは否定できない。ビーブルもまた、ある種のナイーブさとともに、白人の女性と黒人の女性を共に召喚して、足元に広がる世界、すなわちヨーロッパに思いを馳せる。

私の下 奥深くでは天の罨が輝いている
 私はキリストのように南十字星を肩にかけ歩む

世界の反対側にはまた
 足を上げて歩いている人がいる

あの人たちの壊れた靴底を思わなければならない

(…)

世界の反対側にはボヘミアがある
 美しく、エキゾチックな国
 深く、謎に満ちた川にあふれ
 乾いた足で、イエスの名のもとで、横断する²⁰

さらに詩人は、ボヘミアにあってジャワにないもの（「四季」「コート」「ネクタイ」「ステッキ」「雪」「さくらんぼ」）を列挙し、最後は「私たちのところでは冷たい飲み水がある」²¹と締めくくる。この詩の中盤以降、詩人は、すでに一定の知識を得たジャワから懐かしさを覚えるボヘミアに視線を投げかける。既知とのものとなった土地から注がれるその眼差しは、故郷ボヘミアに異国情緒を見出す。「エキゾチックなるもの」は主

体による相対的な空間認識に他ならず、ボヘミアの人々にとってジャワがそうであるように、ジャワの人々にとってボヘミアがエキゾチックなものとなることを詩人は看破する。ボヘミアにいるときは慣れ親しんだヴルタヴァ川もまた「謎」に満ちたものとなり、巨人になったつもりで横断すれば、それは全くの異なる風景となる。この瞬間、エキゾティシズムの反転が生じ、ヨーロッパ人がジャワに投げかけてきた一方的な眼差しは双方向にヨーロッパへも投げかけられうるものであるのを詩人は認識するに至る。つまり、ヨーロッパ人のアジアに対する欲望としての一方的な関係性は破棄され、両者間の立体的な関係性へと移行することになる。イジー・ホリーによれば、「ビーブルのテキストは、人種と文化の優越感に基づく『自己』と『他者』のステレオタイプ的なイメージを評価しない」²²。それゆえ、注目すべきは、植民地を支配するヨーロッパ人に対するビーブルの醒めた眼差しだろう。

嫌疑をかけられたジャワ人の娘が歌われる詩篇「裁判記録」は、同詩集の中で植民地主義の一面が色濃く投影された一編である。中国人の集落から警ら隊が巡回を終えて帰ってくる描写から始まるが、すぐに旋回し続けている「カラスの群れ」が「小柄なジャワ娘」の方へ降りてくることに触れ、どこか不穏な雰囲気漂っていることを告げる。次の連では、中国人の苦力が警官に放火したのを目撃しなかったかと裁判官が娘を尋問している様子が描かれ、さらにはその事件により同警官が命を落としたことが触れられる。

マレー語を話すジャワ娘はゆっくりすすり泣き
 言葉を発するたびに唇は口づけするようにすばむ
 ピギ・マーナ！ 守衛なんて一人も見えていない
 クーリーも見えていない

何も見えていないし、何が起きたか知らない
 あるいは、こう考えていたのかもしれない
 白いランというランはいつの日か

ジャワ島全域に咲き誇ることになると²³

裁判官の声はすべて間接話法で表現され、語り手によって媒介されるのに対し、ジャワ娘の「Pigi mana!」という叫びは直接話法として挿入され、チェコ語の文章の中のマレー語という対比もあり、この一箇所だけ際立った効果を有している。まずこの言葉それ自体によって何を具体的に訴えようとしているのはわからない。確かに文脈から、あるいは彼女の振る舞いから、事件の詳細を知らないことを訴えていることはわかるが、この瞬間、この言葉に何が込められているのかは、詩人および読者として想定される多くのチェコ人読者にはわかり得ない。現地語の使用はエキゾティシズムの一つの指標となると同時に、

単純な理解を拒む意思表示ともなる。当該言語の知識がない者がある意味不明の表現に遭遇したとき、その者は解釈するにあたって想像を働かせるしかない。詩人は、「何も見ていないし、何が起きたかもしれない」と推測を働かせながらも、「あるいは、こう考えていたかもしれない」と別の可能性を示唆する。嫌疑がかけられ苦悩するジャワ娘が発した言葉を解釈するにあたって、詩人が最後に示したのは、「白いランというランはいつの日か／／ジャワ島全域に咲き誇ることになる」という一節であった。植民地主義の醜悪な一風景から距離を置き、ジャワという島の俯瞰的な視点を取り込むことによって、土地を捉える視角を広げる。それは、一時滞在者であるがゆえに、植民地主義の関係性に深く関与することはできないという諦念であったのかもしれないし、あるいは、思い焦がれていた土地の美しさを見たいという欲望の表れかもしれない。しかしながら、ビーブルがここでジャワ娘の現地語での叫びとランの咲き誇る風景という強烈な対比を描き出したことで、この詩集は、ジャワという土地の単なるエキゾティシズム的な、つまり自身の欲望に赴くだけの一面的な表象に陥ることはなく、矛盾や葛藤を内包するテクストとなる。

チェコの文芸批評家F・X・シャルダは、「月に憑かれたピエロ」という言葉を用いて、同詩集を評している。「月から落下したピエロは、野蛮に回転する惑星にいとどこか不安を感じる。(…)ピエロは世界のこと、自分のことははっきりと見つめることはできない。今いない場所につねに憧れを抱き、そこで魔法をかけられ、自分がいた場所に戻ろうとするのだ」²⁴。エキゾティシズムとは、眼差しの問題でもある。見られる側に対して、見る側には何らかの優位性があり、両者間にある落差を埋めるのはしばしば欲望であるからだ。ボヘミアという中欧出身の詩人であるビーブルもまたそのような欲望を幼い時から抱えていた。だが対蹠地に滞在して見えてきたのは、ジャワの自然や人々の驚異であり、そしてまたヨーロッパがもたらした植民地主義という消すことのできない爪痕であった。ポエティスムの詩として、この詩集の多くに描かれているのは、隠喩が多用された様々な対比からなる風景のコラージュである。享乐的と称されることの多いポエティスムの作品の中で、ビーブルがジャワ滞在下敷きにして記したこの詩集は、エキゾティシズム的な精神をある一つの極まで突き詰め、ジャワという一つの表象を手に入れただけでなく、ボヘミアという土地の相対化を行うことに成功した。そしてまた、現地人のみならず、植物、動物という様々な位相の生きとし生けるものを取り組むことによって、1920年代に発表された詩集としても極めて独自の位置を占めていると言えるだろう。

4. 散文『プランシウス』

東洋体験はビーブルに深く刻まれ、詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』以降も、ゾーンの長篇詩『新イカロス』(1929)などでもそのモチーフな重要なものとして継承されていく。一方、ビーブルは旅行の体験をエッセイでも記している。単著としてまとめる意向があったとされるが、残念ながら、生前中は実現されることはなく、没後、エッセイをまとめた『ジャワへの旅』(1958)が刊行された。唯一生前中に単著として発表された散

文が『プランシウス』である。シンガポールからジャカルタまでの旅に利用したオランダ船の船名から題名が取られたこの小冊子は私家版として1931年に刊行され、インジフ・シュティルスキーが装丁を手がけている。八部からなるわずか26ページの小編であるが、詩とは異なる筆致でバタビアに向かうオランダ船での航行の様子が綴られている。オランダ船での体験が主となっているため、オランダ人の乗客が主たる登場人物となり、ヨーロッパ人との関係が一つの軸となっている。

まず冒頭、オランダ人との会話で耳にした言葉の数々が披露される。「スラバヤはどこ？ プランバナ寺院はどこにあるのか？（…）トケーとは何？ バブとは何？」。まだジャワに滞在したことがない詩人にとっては、すべてが新鮮であり、タブラ・ラサのようにオランダ人の発する言葉を記録していく。

旅の始め、アフリカのひと気のない沿岸近くを航行している時、ジャワに触れることはごく稀にしかなく、触れるとしても、翼で触れるかのようにほんの少しだけ。だがそのあと、船とともに、彼らの言葉の流れは東へと流れ、緑のラインへと流れ出るあの硬い言葉のオランダ語は、マレー語やジャワ語の芳香な流れとともに美しくなり、悲しさを増す。夜、三重の闇の中、目を閉じ、手を目に当てながら、私にはわからない言葉に耳を傾け、何時間ものあいだ、あまりにも切ない彼らの音楽によって興奮させられるがままにする。

BURUBUDUR

Uの文字は仏像を置く壁龕のようじゃないか？²⁵

オランダ語、マレー語、ジャワ語が飛び交うなか、まだいずれの言語にも長けていないビーブルは、かろうじて知っている名跡の名称に耳を傾け、音から綴りを想像する。「BURUBUDUR」（ボロブドゥール）という単語に繰り返されるUの文字の形状から「仏像を置く壁龕」を連想する様子は、ネズヴァルの詩集『アルファベット』に触発され、アルファベットの文字を踊りで体現したミルチャ・マイェロヴァーの表現と呼応するものであり、ポエティズム的な連想とも言えるだろう²⁶。

だが、船上という限定的な空間での時間は、必然的に同乗者、とりわけオランダ人関係者との交流が盛んになる。そのため、ビーブルは、彼らの言動、振る舞いを通して、ジャワの人々との関係を目撃する。詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』所収の「裁判記録」は、ビーブルの詩の中で植民地主義がきわめて色濃く投影された詩篇であることは触れたが、その意識はこの散文においてより明確に描かれている。

「ジョンゴス！」

ザクセ夫人はアイスクリームを注文する。

ドイツ船ヨルク号の甲板で、ザクセ氏が紅茶を注文したのに給仕は持ってこないのに腹

を立てていたのがなぜか、私は少しずつ理解し始める。「これはオランダ船で起きることはない。あそこではすべて自明だ。ジョンゴスって知ってるかね？ 知らない、知ることはない。ジャワにいたことがない者はそれを知ることはない」。ザクセ氏はニヤリとして、ジェノアからバタビアまでの橋の弧を宙に描き、吸いかけの葉巻を海に放り投げると、魚が集まった。

「ジョン…！」

ヤンセン氏はシェリーのグラスを所望する。

すぐに運ばれる。

少しずつ、私は理解する。言葉の半分、残り半분을飲み込むだけで、すぐに願いが叶えられるたった一つのことを。

「ジョン…！」

マッケラス氏は、魚を食べたくなる。

すると目の前に。

それは、「テーブルを用意しろ」ということ。「ジョン…」それは、ローストチキンであり、ロブスターであり、カスタードであり、パイナップルであり、インドネシアのありとあらゆる快適さのことなのだ。私は少しずつ理解し始めた²⁷。

同乗したオランダ人の面々がことあるごとに発するのは「ジョンゴス」という単語だった。この言葉を発すると、各人が所望したものが次々と目の前に置かれていく。はてには「ジョン…」と言葉の一端だけが発せられるだけで、ことが足りようになる。これは「給仕」を意味する単語であるが、最後にビーブルが述べているように「インドネシアのありとあらゆる快適さ」を体現する表現であった。それは当然ながら、「給仕」への命令を伴う表現であり、「ジョンゴス」は主の願いを叶えるための下僕という関係性のもとに構築されている。

「ジョンゴス」をめぐる考察はさらに続く。

マレー語の教科書を開く。一頁目にある一つ目の言葉。ジョンゴス。ジャワ風の座り方をし、私の動きを見ている。ジョンゴス。東方の人々が皆そうであるようにじっとした顔をしている。生涯仕えたとしても、その自然な高貴さは決して失わず、あなたを見るときも、薄い光度の星を見るかのように、脇を見る。自らの意思で半分眠っている状態になり、そこで軽く目覚め、あなたの要望を見てとると、それらを自動的に、躊躇せず、嫌がらず叶えてゆく。「ジャワ人は、世界で最高の召使いだ」とオランダ人はあなたに語るはず。

Saja minta ajer banda —— 喉が渴いたら、こう言えばいい。食欲を示したいときは、Makan! あるとき、ザクセ氏は、二週間もすればマレー語を十分にマスターできるだろうと私に断言する。その通り。マレー語には文法がなく、それを用いるのは命令形のみ。マレー語を話すことは指示を出すことであり、あといくつかの罵倒表現さえ知っていれば十分で、

いかに簡単な言語が驚くことだろう²⁸。

冒頭「ジョンゴス」という表現が掲載された教科書をめくりながら、詩人はその言葉が発せられる対象、「東方の人々」の姿を見る。主人の命令に答える人びとの姿に「自然な高貴さ」を見出す姿勢にはややヨーロッパ人の欲望の投影ともとれなくもないが、その像の多くは目の前でジョンゴスに指示を出すオランダ人のものでもある。「世界で最高の召使」としてジャワ人を称揚しながらも、用いるのは「命令形」と「罵倒表現」があればよいとする。つまり、ここにあるのは、オランダ人の主人とジャワ人の召使という非対称的な言語コミュニケーションである。だがビーブルはそのどちらでもない。オランダの人々の言葉にうなずきながらも、ある疑問を彼らに投げかける。

「マレー語がよく話せるかって？」ヤンセン氏は勿論だと私に断言した。「私はジャワに十五年いるからね」

「マレー語で『ありがとう』は何て言うんですか？」彼の心臓を狙っていないふりを装いながら、私は尋ねる。

「何だって？ 何？」だがしまいには知らないことを認めざるをえなかった。ザクセ氏も知らなければ、マッケラス氏も知らず、その場にいた誰も知らなかった。

「ちょっと待って」ザクセ氏が言った。「ベルゲル技師を呼ぼう」キニーネのことが耳に入らず、聞く耳を持っていないようだった。悪寒がカジノまで長引いたせいも、それとも、私がシンガポールで船に乗ったその時から私を蔑んでいたためか、いまでも、私に背を向けている。鼻眼鏡をかけたまま二、三度笑みを浮かべると、高い緊張から尋ねた。

「マレー語で『ありがとう』は何て言う？」

ザクセ夫人は、劇場で戯曲を見ているように興奮していた。ヤンセン氏は楊枝を持っていなかったのでマッチの棒を折ってテーブルの下へ投げ、マッケラス氏は重要な決戦だと言わんばかりにテーブルを両手でどんどんと叩いた。だがベルゲル技師はその均衡から脱することはできなかった。

「わからない」と言った。「これまでそんな言葉を必要としたことはなかったが、きっと諸君もそうだろう。どうしてそれが必要だと言うんだ？ マレー語で一緒に会話することがあるか？ 一度もない。マレー語で話すのは、地元民に対してだけだ。もしあなたが好奇心の渴望を満たしたいのなら、私ではない誰かふさわしい人物に尋ねるべきだ」²⁹。

長年マレーの地での生活経験があるはずの男性は何を聞いてもかまわないと言ったにもかかわらず、「ありがとう」という言葉を知らずにいる。ただ知らないのではない、知ろうという意識もない。そこで彼は逆に問いかける。「マレー語で一緒に会話することがあるのか？」と。つまり、言語コミュニケーションが成立する対等な関係に直面する機会はないのだから、そのような言葉は不必要であるという論理である。対等のコミュニケー

ションが成立していないことは、「ありがとう」という感謝を告げる言葉の不在といういびつな言語運用の環境が多くを物語っている。フランツ・ファノン植民者が原住民に語る言葉について、「動物学の言葉」³⁰だと看破したように、そこには一方的な眼差しの偏差しか介在しない。植民地をもたない新興国のチェコスロヴァキアから一時滞在者としてこの地を訪れたビーブルにとってみると、ジャワの自然と人々の営み同様に、宗主国オランダ人の振る舞いもまたエキゾチックなものであったと言える。それゆえ、きわめて素朴な形で船上の会話の風景をエッセイとして切り取ったのだろう。

このあと、詩人の問いに答えられなかった男は、ビーブルに近づいて抱擁すると、こう語る——「あなたはチェコスロヴァキア人かね？ それは結構！ でも、どうしてあなたはそんなに黒いんだい？ 失礼、混血かと思いましたよ」³¹。日焼けをいとわず、太陽を浴びて、よく灼けたビーブルに向かって、失礼な質問をしたことが「混血」であることと何か関係があるかのように言葉が発せられたのである。

小編『プランシウス』の結末もまた船上の風景が描かれる。だが今度は船上の人々が対岸の景色を眺めている。それは煙があがるバタビアの様子だった。

「ジャワで蜂起があった」

皆、欄干に駆け寄る。(…)

ザクセ夫人は一番に叫び声をあげる。

「私の真珠！」

略奪された引き出しを思い浮べていたのだろう、かたやザクセ氏は倉庫がこじ開けられ、何百もの自転車も四方に運ばれているのを見ていた。ヤンセン氏は片手を妻の肩に置き、もう一方の手をナイフを落とした給仕の首にあてていた。マッケラス氏は自宅を守るべく、窓から路上に発砲していた。ベルゲル技師は、プランテーションで反乱が膨れ上がるのを見ていた。

皆、海を見ている。皆、バタビアが燃えている様子を見ている！ 私は、上の方で折れている簪をつけた日本人女性の後ろに立っていると、簪の格子越しに太陽が沈むのが見えた³²。

船上から憧れの地ジャワで目にしたのは、植民地の現状に不満を抱き、反乱する現地の人々であり、またその様子に困惑を隠せずもないオランダ人の姿であった。ヤン・ムラーゼクは、植民地を有するオランダ人との会話の中でその立場を確立できないビーブルについて、「植民地世界におけるチェコ人という架空の（非）存在」³³と述べているように、現実の植民地世界において、ビーブルは利害的な関係を有さない一時滞在者でしかなかった。それゆえ、この最後のシーンにおいても、財産が略奪されていくのを心配するオランダ人を横目に、詩人は、目の前にいる日本人女性の後ろ姿に見とれているしかない。確かに、1929年に初めてマレーを訪れた金子光晴は、「スマトラ全島は、近い将来

に於て、外国資本の手によって解体されつくし、住民の生活様式にも、一大変転がこななければならないということは、疑うべき余地はない」³⁴と、植民地主義の将来を予期したかのような一節を記したが、ポエティズムの詩人であったビーブルの文章にはこのような悲壮感はない。むしろボヘミア出身の人物として、美しいものも、醜いものも、禁忌に触れるものも積極的に受け入れようとしたように思える。そのような試みは時として植民地のオランダ人の人々の規範を侵犯することとなるが、植民地を有さないボヘミアの一時滞在者として独自の視点を詩や散文を通して築いたとも言えるだろう。

5. 結びに

デレク・セイヤーは、デヴィエトスィル、ポエティズムの詩人たちが想像力を発揮して作品を次々と生み出したことについて、こう述べている。「プラハの若い作家と芸術家が、海や摩天楼からも遠く離れたヨーロッパの内陸の中心で孤立していなかったら、これらの作品ははるかに冒険心のないものになっていたかもしれない。無限と思われた想像上の未来と、回帰することがつねに求められた想像上の過去との交差点にその都市はあった」³⁵。たしかに自由奔放な想像力、活力溢れる世界観はこの世代の芸術の中核を担うものとなった。だがそれゆえに、東南アジアを実際に旅行し、現地の自然や人々の様子だけではなく、植民地の世界の一端を知り、考察したビーブルの詩作は特殊な位置にあると言える。エキゾティシズムを反転させただけでなく、ユーモアと畏怖とともに、ありとあらゆる生を描こうとしたからである。

ビーブルの詩集以後のチェコ文学で植民地主義の問題を正面から描いたのは、カレル・チャペックの『山椒魚戦争』（1935-1936年、新聞に掲載）であった。1930年代のファシズムの台頭を背景にしたこの物語が始まるのは、奇しくも、オランダ船に乗るチェコ出身の船長の東南アジア滞在だった。このように捉えると、東南アジアの海、土地は、1920年代から30年代にかけて、内陸のボヘミアの詩人たちに想像力のレベルで多大な刺激を与えたばかりか、ビーブルがボヘミアを「エキゾチック」なものとして見ることを称揚したように、自己の他者化という叙述の面においても影響を与えたと言えるだろう。

注

1. 大橋洋一「ボヘミアの海岸 シェイクスピアと中欧」『れにくさ』第6号、249頁。
2. ケヴィン・リンチが『都市のイメージ』で用いた概念。ポエティストたちのメンタル・マップについては、以下の拙論を参照。Kenichi Abe, „Exotiky se chraň nebo-li mentální mapa poetistů,“ *Slovníky modernistů a paradigmata moderny*. České Budějovice: Jihočeská univerzita, (in printing).
3. Zdeněk Pešat, „S lodí jež dováží čaj a kávu“, in: Miroslav Červenka, Vladimír Macura, Jaroslav Med, Zdeněk Pešat, *Slovník básnických knih*, Praha: Československý spisovatel, 1990, s. 257.
4. Konstantin Biebl, „Rezervista,“ in: Konstantin Biebl: *Básně*, Brno: Host, 2014, s. 71.
5. K. Biebl, „Odjezd,“ *ibid.*, s. 73.
6. Karel Srp, *Karel Teige a typografie: Asymetrická harmonie*. Praha: Arbor Vitae, 2009, s. 145. 1927年末から1928年初頭にかけて、初版と第二版が続けて刊行された。ともに装丁はタイゲが手がけたが、百部限定の初版は著者の直筆署名および通し番号入りで、タイゲ自ら水彩を施した箱入りの豪華版であった。ここでは二版の装丁を念頭に置いている。
7. K. Biebl, „Orient,“ in: *Básně*, s. 172. 「私はいつも料理本、／アニス、マスカット、ヴァニラに嫉妬した。／／クリスマスが好きだった／あのムハンマドの祝日が。／／クリスマスの夜、／母はオレンジを／十二個の三日月刀に切り分ける。／／そして私たちに一つずつ配るのだ」(s.172)。
8. K. Biebl, „Pacienti,“ *ibid.*, s. 164.
9. K. Biebl, „S lodí jež dováží čaj a kávu,“ *ibid.*, s. 174. この詩は脚韻が特徴的であるため、参考のために原文も以下に引用する： „S lodí jež dováží čaj a kávu / pojedu jednou na dalekou Jávu // Za měsíc loď když vypluje z Janova / Stane u zeleného ostrova // Pojedem spolu já a ty / vezmeš s sebou jen kufřík a svoje rty // Pojedem okolo pyramid / loď počká až přejde Mojžíš a jeho lid // S vysokou holí zaprášenými opánky / jde první přes mořskou trávu a rozkvetlé sasanky // Hejno ryb na suchu zvedá svá křídla jako ptáci / letí za vodou a ve vlnách se ztrácí.“
10. K. Biebl, „Yorck,“ *ibid.*, s. 175.
11. K. Biebl, „Tulácká,“ *ibid.*, s. 177.
12. K. Biebl, „...,“ *ibid.*, s. 183.
13. K. Biebl, „Na hoře merbabu,“ *ibid.*, s. 184.
14. K. Biebl, „Amin,“ *ibid.*, s. 185-186.
15. K. Biebl, „Toké,“ *ibid.*, s. 188.
16. *Ibid.*, s. 189.
17. トケーは吉兆を知らせるともされるが、攻撃的なため室内にいるのは好まれず、その存在は雨の前触れとも言われ、またチチャクは家の中を自由に歩き回るため、ほかの家で見たり聞いたことを話すとも言われている。Robert Wessing, “Symbolic Animals in the Land between the Waters: Markers of Place and Transition,” *Asian Folklore Studies*, Vol. 65, No. 2, 2006, p. 205.
18. K. Biebl, „Cesta na jávu,“ in: *Cesta na jávu*. Praha: Labyrint, 2001, s. 61.
19. Vladimír Macura, „Básnický cestopis,“ in: Daniela Hodrová (ed.), *Poetika české meziválečné literatury*. Praha: Československý spisovatel, 1987, s. 45.
20. K. Biebl, „Protinožci,“ in: *Básně*, s. 192.
21. *Ibid.*
22. Jiří Holý, „Komentář,“ in: Konstantin Biebl, *Básně*, Brno: Host, 2014, s. 373.
23. K. Biebl, „Soudní referát,“ *ibid.*, s.187.
24. F. X. Šalda, „O nejmladší poesii české,“ in: *Studie z české literatury. Soubor díla F. X. Šaldy, sv. 8. Ústavu pro*

- českou literaturu ČSAV v nakladatelství Československý spisovatel. 1961, s.180
25. K. Biebl, „Plancius,“ in: *Cesta na Jávnu*, s. 121.
26. ネズヴァルの詩集『アルファベット』およびそのマイエロヴァーの舞踊については、拙著『カレル・タイゲ ポエジーの探求者』水声社、2017年、63-64頁参照。
27. K. Biebl, „Plancius,“ in: *Cesta na Jávnu*, s. 127.
28. Ibid., s. 128.
29. Ibid., s. 132.
30. フランツ・ファノン『地に呪われたる者』鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、1996年、42頁。
31. K. Biebl, „Plancius,“ in: *Cesta na Jávnu*, s. 132.
32. Ibid., s. 134.
33. Jan Mrázek, “Returns to the wide world: errant Bohemian images of race and colonialism,” *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 2, 2017, p. 143.
34. 金子光晴『マレー蘭印紀行』中公文庫、1978年、173頁。
35. デレク・セイヤー『プラハ、二〇世紀の首都 あるシュルレアリスム的な歴史』阿部賢一・河上春香・宮崎淳史訳、白水社、2018年、288頁。

参考文献

- Biebl, Konstantin. *Cesta na Jávnu*. Praha: Labyrint, 2001.
- Biebl, Konstantin. *Básně*. Text edičně připravil a komentář napsal Jiří Holý. Brno: Host, 2014.
- Holý, Jiří. Der Exotismus und Apollinaires Spuren in Biebls S lodi jež dovází čaj kávu and Nový Ikaros. *Wiener slavistisches Jahrbuch*, 2011, bd. 57, S. 21-35.
- Macura, Vladimír. Básnický cestopis. In: Daniela Hodrová (ed.), *Poetika české meziválečné literatury*. Praha: Československý spisovatel, 1987, s. 33-55.
- Mrázek, Jan. Returns to the wide world: errant Bohemian images of race and colonialism, in: *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 2, pp. 135-155.
- Pešat, Zdeněk. S lodi jež dovází čaj a kávu. In: Miroslav Červenka, Vladimír Macura, Jaroslav Med, Zdeněk Pešat: *Slovník básnických knih*. Praha: Československý spisovatel, 1990, s. 256-258.
- Sedláček, Jakub. Pasažér z kajuty 366; Ediční poznámky. In: Biebl, Konstantin. *Cesta na Jávnu*. Praha: Labyrint, 2001, s. 137-144.
- 大橋洋一「ボヘミアの海岸 シェイクスピアと中欧」、『れにくさ』第6号、2016年、245-263頁。

The Exoticism in Konstantin Biebl's "With the Ships that Import Tea and Coffee"

Kenichi ABE

This study explores the exoticism in Konstantin Biebl's "With the Ships that Import Tea and Coffee". It points out that the poet describes not only his excitement of his journey in Ceylon and Java, but also his respect for the nature and all the creature such as lizards, toads, etc. It worth noting that Biebl presents some scenes of colonialism in his poems (Soudní referát, etc.) and proses (*Plancius and The Journey to Java*). Biebl reverses his exotic view on the southeastern Asia by regarding his native land as an exotic place ("On the other side of the world is Bohemia / A beautiful and exotic land"), this is because he as a Czech, citizen who had no direct relation with the colony, could have transgressed the stereotyped view on colonial society and presented the unique image with humor.